

第7回東北発コンパクトシティ推進研究会

開催レポート



■研究会の目的・経緯

東北地方整備局では、東北の地方都市における「コンパクトシティ」の考え方や、その実践に向けた取組み方法について検討することを目的に、平成16年2月に1回目の「コンパクトシティ研究会」を開催しました。

コンパクトシティ研究会は、主に学識経験者等による講演会形式で行われ、東北の地方自治体（県、仙台市及び人口10万人以上の市町村）担当者の参加を得て、平成19年2月までの間、合計6回開催されました。

平成19年度からは、名称を「コンパクトシティ推進研究会」に変更し、即時的な研究課題への参加者間のディスカッションを行うことに重きを置いた実施体制とするとともに、参加対象を人口3万人以上の市町村にまで拡大しました。

さらに、平成21年8月に大臣決定された「東北圏広域地方計画」では、研究会で検討してきた東北圏のまちづくりを「東北発コンパクトシティ」とし、広域連携プロジェクトとして、推進していくことが記載されたことから、平成22年度からは、名称を「東北発コンパクトシティ推進研究会」に改め、新潟県を含めた東北圏（7県）を対象に開催しています。

■第7回東北発コンパクトシティ推進研究会開催概要

東北発コンパクトシティの実現にあたっては、街なかの空き店舗や空き施設を有効活用した魅力ある市街地の形成や、自家用車に過度に依存せず、公共交通の利便性向上による快適な移動の確保が求められることから、第7回目となる今回は、「①中心市街地の魅力向上」および「②市街地の円滑な移動の確保」をテーマに、中心市街地の魅力向上に向けた再開発や拠点を結ぶバス交通戦略を先進的に取り組んでいる青森県八戸市、アートを活かし中心市街地の魅力向上に取り組んでいる十和田市において、10月2日、3日の2日間の日程で開催しました。

・「中心市街地の魅力」については、郊外の土地利用を抑えただけでは中心市街地の活性化は難しく、住民が出かけて行きたいと思う魅力的な場所づくりや活性化した賑わいの効果を上げていくことが課題となっています。

・「市街地の円滑な移動の確保」については、拠点をつなぐ利用者のニーズにあったモビリティの提供や利用する目的となる魅力ある拠点づくりとあわせた問題解決への取組みが求められています。

■開催日・場所等

開催日:平成25年10月2日 13:30~17:30

平成25年10月3日 9:00~12:00

会 場:青森県八戸市 八戸グランドホテル 3F 双鶴の間

主 催:東北発コンパクトシティ推進研究会(事務局:国土交通省東北地方整備局)

後 援:日本都市計画学会東北支部

出席者:学識経験者および国、県、市町村の都市計画担当者

(学識経験者)福島大学名誉教授	鈴木 浩 氏
弘前大学教授	北原 啓司 氏
長岡技術科学大学副学長	中出 文平 氏(欠席)
長岡技術科学大学助教	松川 寿也 氏(代理)
東北大学大学院准教授	姥浦 道生 氏
福島大学准教授	吉田 樹 氏

■開催プログラム・配布資料等

【1日目】

1. 開会
2. あいさつ
3. 出席者紹介
4. 基調講演 「中心市街地の「空間」を「場所」に変えるコンパクトシティ戦略……Report 1
(弘前大学大学院 教授 北原 啓司 氏)
5. 事例紹介 「八戸市におけるバス交通戦略」……Report 2
(八戸市 都市整備部 都市政策課)
「八戸ポータルミュージアム「はっち」でまちを元気に」……Report 3
(八戸ポータルミュージアム「はっち」)
「アートを活かしたまちづくり」……Report 4
(十和田市 建設部 都市整備建築課)
6. 全体討論
テーマ
①中心市街地の魅力向上……Report 5
②市街地の円滑な移動の確保……Report 5
7. 現地視察
①はっち管内……Report 6

[【PDF】東北経済産業局 情報提供資料 「中心市街地活性化施策の方向性」](#)

[【PDF】東北地方整備局 情報提供資料-1 「都市再構築戦略検討委員会 中間とりまとめ」](#)

[【PDF】東北地方整備局 情報提供資料-2 「集落地域における「小さな拠点」づくりの推進」](#)

[【PDF】東北地方整備局 情報提供資料-3 「集落地域の大きな安心と希望をつなぐ「小さな拠点」づくりガイドブック」](#)

[【PDF】東北地方整備局 情報提供資料-4 「地方都市の現状・課題 都市再構築戦略検討委員会」](#)

[【PDF】東北地方整備局 情報提供資料-5 「地方都市の現状について 都市再構築戦略検討委員会」](#)

【2日目】

1. 現地視察

- ①十和田現代美術館.....Report7
- ②アート広場.....Report7
- ③官庁街通り.....Report7
- ④ArtStationTOWADA.....Report7

Report1 【基調講演】

中心市街地の「空間」を「場所」に変えるコンパクトシティ戦略

弘前大学大学院 教授 北原 啓司 氏

本研究会の委員である、弘前大学大学院教授の北原啓司氏より、「中心市街地の「空間」を「場所」に変えるコンパクトシティ戦略」と題し、基調講演を頂きました。

講演では、中心市街地にあふれている空洞化した空間を場所に変えるということがどういうことか、街を育てていくということがどういうことかについて、十和田市、弘前市、八戸市の取り組みも含めてお話しいただきました。



[【PDF】資料1: 中心市街地の「空間」を「場所」に変えるコンパクトシティ戦略](#)

Report2 【事例紹介】

八戸市におけるバス交通戦略

八戸市 都市整備部 都市政策課

テーマ②「市街地の円滑な移動の確保」にかかる取り組みとして、青森県八戸市から、「八戸市におけるバス交通戦略」と題し、事例紹介を頂きました。

ここでは、新幹線駅である八戸駅と約6km離れている中心街間の移動への課題について、主に路線バスの利用促進のための「市内幹線軸等間隔運行プロジェクト」や「来街者対策バス情報案内プロジェクト」などの取り組み等について紹介していただきました。



[【PDF】資料2: 八戸市におけるバス交通戦略](#)

Report3 【事例紹介】

八戸ポータルミュージアム「はっち」でまちを元気に

八戸ポータルミュージアム「はっち」

テーマ①「中心市街地の魅力向上」にかかる取り組みとして、八戸ポータルミュージアムはっちから、「八戸ポータルミュージアム「はっち」でまちを元気に」と題し、事例紹介を頂きました。

ここでは、観光・文化振興、新たな交流、創造の拠点として中心市街地だけでなく八戸全体の活性化の玄関口として整備された「はっち」について、施設内容やまちを元気にする取り組みについて紹介していただきました。



[【PDF】資料3: 八戸ポータルミュージアム「はっち」でまちを元気に](#)

Report4 【事例紹介】

アートを活かしたまちづくり

十和田市 建設部 都市整備建築課

テーマ①「中心市街地の魅力向上」にかかる取り組みとして、青森県十和田市から、「アートを活かしたまちづくり」と題し、事例紹介を頂きました。

ここでは、十和田市における中心市街地活性化に向けた取り組みとして、事務所の統廃合などで空地となった官庁街通りの有効活用としての十和田市や民間事業者による拠点整備や、現代美術館と連携したまちなかアートの展開による中心市街地の活性化の取り組みについて紹介していただきました。



[【PDF】資料4: アートを活かしたまちづくり](#)

Report5 【全体討論】

司会進行 弘前大学 教授 北原 啓司 氏

基調講演および事例紹介の内容をもとに、今回のテーマである「中心市街地の魅力向上」および「市街地の円滑な移動の確保」について、学識経験者を交え、討論しました。

テーマ①：中心市街地の魅力向上

テーマ②：市街地の円滑な移動の確保

討論で出された主な意見

- ◆ 中心市街地のところでのバス交通について、100円バスを実施し、郊外は廃止路線が増え、赤字路線が増えているのでマイタウンバスで運行し5～6年かけて成果を出し、軌道に乗せている。
- ◆ 全国的に問題となっている大規模店舗の跡地利用はイベント活用程度でハードにつながる話がない状況である。
- ◆ 何をつくるかではなく、どういった人が集まる場所をつくるかということが大事なんだと感じた。
- ◆ 人が集まるなど賑わいの機能が活性化した施設から、中心市街地に賑わいを波及させていくことが課題となっている。
- ◆ 地方都市における中心部へのアクセス性を考慮し、情報発信により公共交通と自家用車利用のための施策を両方展開しているバランスについて、概ね昼間で1時間に1本程度のバス本数が確保されていると公共交通利用において生活の利便性を落とすことなく、効果が上手く出る可能性がある。また、エリアあるいは区間というところを見据えていくことが非常に大事かと思われる。
- ◆ 公共交通とコンパクトシティで考える切り口として、一定程度の自家用車利用というのは確保していないといけないのは現実の問題として事実と思う。それをどうやってシフトしていくかを考えなければいけない。市街地における低未利用地の運用として中市街地を虫食いにさせる安易な駐車場投資など、ここのマネジメントをどうするか考えないと土地利用の問題としてまずくなるのではないか。
- ◆ 人口減少社会に入っており今後若者の数が減っていく中、自動車交通に対するニーズを数十年スタンスで考えたとき、前倒ししながら対策を打つことが迫られている。
- ◆ 超高齢化社会を迎え、車を運転しない高齢者が増えることが予測される、ライフスタイルだとか生活の困難さ、その時どういう交通手段を利用するか、このあたりの分析を丁寧にやるのが今、目の前の課題としてあるのではないかと感じている。
- ◆ あと15年もすれば自動運転がかなりできてきて、その時に都市の形、コンパクトシティがどうなっているんだろうと思っている。今はコンパクトシティというのは交通問題が非常に大きいといわれている中で、時代によって変わっていく都市の形で、公共交通というよりも別の施策もいろいろ考えながらとなっていくのか甘い考えではあるが思ったりしていて、サステナビリティとかコンパクトシティが今はやっているが、次にくるのはなんだろうと半分空想みたいな話だが考えている。
- ◆ 公共交通の利便頻度を上げる、利便性を向上させることだけでまちなか回帰・中心市街地活性化ができるかという点と難しいと考えている。



- ◆ あまり街なかに行きたいという魅力が感じていない中で、郊外と街なかの公共交通の利便性をあげても、結局それはなかなか使ってもらえないだろうと感じている。
- ◆ 土地利用を上手く使ってその街なかで魅力あるようなもの、高齢者の方々に使っていただけるようなものがたくさんできれば、それなりに公共交通を使って高齢者もたくさん移動してくれるかなという風に考えている。
- ◆ 都市における公共交通の必要性がこの30年の間に変わってきていて、かつて郊外の住宅地は公共交通がつながっているという条件が大きかったが、今は地域住民でNPOを作って有償の運送を始めるなどしないと公共交通に依存できなくなっている。その時公共交通を増やしてコンパクトシティといってもその地域の中心部とは意味が異なり、一括した公共交通という話にならないと思う。

- ◆ 最近気になるのは公共交通を使って街を楽しむというライフスタイル。公共交通を使ったほうがその街を楽しむのにいい生活を描くこと。生活の楽しさのようなものを一緒にからめて考えていくことが必要かと思っている。



- ◆ 中心市街地活性化は「質が高く、暮らしやすい」空間にしていくことが大事であるが、都市と里地の連携の中で郊外の土地利用ということもあわせ技でかならず考えていただきたい。

- ◆ どのようにして市民の人が行きたいと思う、楽しい、面白い魅力的な場所をつくるかにつきて思っている。市民の人が何を求め、どういうものを欲しいと思っているのか、行政目線として考えるというか自分が市民としてどういう場所を欲しいのかを突き詰めて考えると答え事態は難しいかという気がしている。それをどうやってつくっていくかのプロセスが非常に難しく、ある程度答えが見えても根深い不信感の連鎖がある気がして、プロジェクトや勉強会を通じて、ひとつひとつ解きほぐしていくことからスタートさせ、小さな成功例を積み重ねていくことが重要なのかなという印象を受けた。



- ◆ 移動販売や宅配サービスなどを使って自分が出かけなくても物が入手可能な時代になったが、それであれば移動手段が提供されていなくても十分だという話になれば街は要らないわけだが、そのようなサービスが使える郊外にお住まいの方で、それにかなり頼っている方であっても出かけたという欲求が強い。出かけたという欲求が強いからこそ、街なかがかっちり活用され、目的にとなる場が出来ることでその欲求がはじめて達成される。モビリティをどう提供するかの問題と魅力ある目的地が出来るかという問題はどちらが欠けてもうまく行かず、そのようなものが大都市・中都市・小規模都市で考え方が異なるかもしれないが、ひとつ有効な視点かと思っている。

- ◆ 街なかの魅力あるいは公共交通も含めた究極の課題として、地方都市は人口が減ることに直面しないといけない。若者の雇用、地域経済、循環型経済をどのようにつくるかというところにこそ地方都市のこれからの帰趨がかかっているのではないか。地域資源を活かした産業、そこに立ち向かっていかないと人口減少、高齢化に対応するような本筋が見えてこないのではないか。中心市街地の元気度はそこでどのくらい雇用が生まれるか、地域経済が廻っていく実態がそれによってできてるかというところまでつなげていくようなそういう課題が横たわっていることをどこかで絶えず確認していく必要があるのではないか。

- ◆ 被災地のとある復興を目指す都市で、まさに今、東北発コンパクトシティをつくろうという話があって図面を見るとみんながここに行きたいと思うような場所にあるだろうかと思う。決まった期限の中にそこに物語をつくっていく時に、本当に中心市街地が持っている行きたいと思うような存在意義を地域が考えていく余裕、時間がない。被災地じゃないところでは表にでていないから気がつかないだけで、今動かないといつ動くんかという状況になっていることを考えていただきたい。

- ◆ 郊外ショッピングセンターは、自動車依存の生活が支えてきた。既存の中心市街地は文化を育ててきたが、開発する側は、自分たちに足りないと感じているので街なかの文化の連動だった映画館を全部郊外店舗に取り込みなんとかする。でも本当の文化は既存の街が育ててきた、そのような意味でも中心市街地の魅力はその空間があればいい世界でつくると、できたあとに個々の質の高い文化を育てられるのか考えると、きつくなる。こういうのもコンパクトシティの中心市街地のひとつの魅力であり、モビリティが貧弱でも行きたくなくなってしまう街とか物語とかいうのと一緒に考えてくる魅力ってなんだろうという話が必要かと思う。土地利用の良し悪しはしっかりすべきと思うが、同時にその街なかの魅力を一緒に考えていくことが東北のコンパクトシティだと思う。



- 情報提供(東北経済産業局)
9月に発表された概算要求資料について情報提供。
市街地活性化が達成されていない部分があり、来年度は選択と集中という仕掛けで1階建て2階建てという考え方でおり、資料を持ち帰りいただき、分からない点があったら東北経済産業局へ相談いただきたい。

Report6 【現地視察】 はっち館内

八戸市

青森県八戸市における中心市街地活性化の取組箇所として、中心市街地に人と情報を集め、その交流を通したゆとりや豊かさを市民や観光客に提供する地域活性化拠点として整備された「八戸ポータルミュージアム はっち」を見学しました。

□現地視察： はっち管内

八戸市の中心市街地に位置し、八戸の魅力を集め、世代や地域を越えた交流によって八戸ならではの魅力を生み出す施設として整備された「はっち」を視察しました。

はっちでは、八戸の見どころを展示したテーマ別屋台や子どもと大人のための交流空間、八戸の生活文化を体感できる仕組みなど説明していただきました。



Report7【現地視察】

十和田市現代美術館、アート広場 ほか

十和田市

十和田市における中心市街地の魅力向上の取組箇所として、①通りから作品が見える街へ開かれた美術館として整備された「十和田市現代美術館」、②十和田市のシンボルロードであり、野外芸術文化ゾーンとして整備されている「アート広場、官庁街通り」、③観光情報、物産販売など観光物産センターとして機能している「ArtStationTOWADA」を見学しました。

□現地視察：十和田市現代美術館

市のシンボリックな通りである官庁街通りに、空地の有効活用、景観、中心市街地の活性化という観点で整備された「十和田市現代美術館(平成20年開館)」を視察しました。

十和田市現代美術館では、通りから作品が見える開かれた美術館であることや、施設内の展示作品等について説明していただきました。



□現地視察：アート広場、官庁街通り

アート広場、官庁街通りでは、アート作品、せせらぎ水路、歩行者用サイン等について、視察しました。

官庁街通り全体を美術館に見立て、野外芸術文化ゾーンとして整備することにより現代美術館と連携したまちなかアートの展開や官庁街通りの歴史等について説明していただきました。



□現地視察：ArtStationTOWADA

官庁街通りと商店街の接続箇所に位置に暮らしにぎわい再生事業の活用により民間事業者が整備した「ArtStationTOWADA」を視察しました。

ArtStationTOWADAでは、十和田市の観光物産センターが入居した商業複合施設としての機能について説明していただきました。

